

稲作に支障が出ないように迅速な災害復旧を 日本共産党上越市議団などが県農地部長に緊急要請

日本共産党上越市議団は10日、新潟県庁に出向き、農地部長に対して今回の豪雨による災害対策について緊急要請を行いました。要請行動に参加したのは、上越市議団全員のほか、竹島県議、諸橋長岡市議、亀山加茂市議等です。農地部長に緊急要請した主な事項と部長発言の概要は以下の通りです。

① 早急に激甚指定されるよう国に働きかけていただきたい。

(部長) 気持ちはまったく同じ。激甚指定されると国庫補助率のかさ上げもあるが、市町村が



単独事業をやるときに起債がきくようになる。その分、細やかな事業ができるようになるので、私どもとしても実現させたい。② 出穂期を

迎える水田の灌水などに支障が生じないように迅速な農地災害復旧を行っていただきたい。査定前にも応急的な仮復旧を柔軟に行い、査定後に遡及して対応していただきたい。

(部長) 査定前着工という仕組みもあるので、それも活用しながらやっていきたい。実際やっているし、スピード感を持って対応していきたい。仮復旧工事については仕組み自体が、査定申請の時に遡及も含めて申請できる仕組みになっているので活用していく。

③ 水田、畑、養鰻池に通ずる農道の崩落、陥没、土砂流出による通行不能の現状を解決しなければ新たな耕作放棄地が生まれることになり。農道の早期復旧に全力で取り組んでいただきたい。

(部長) 農道早期復旧については我々もとしても一生懸命やっていく。一般の県市町村道が相当やられていて、農道はその先にあるのでなかなかそこまでいっていない。市町村の手がまわらないところは県職員を出して被害確認など協力してやっている。

④ 県単水害農地等復旧事業について、中越地震の際の「手づくり田直し事業」と同様に小規模農地復旧補助率4分の3以内の県支援をおこなっていただきたい。また、「事業費15万円以上では小規模の復旧工事に対応できない」という声をふまえて、規模要件をなくしていただきたい。

(部長) 県単事業、県は35%出しますよと言っているが、仕組みからいうと、土木部サイドの事業と違って、もともと市町村がやる事業があるのが前提となっている。なければ、つ

くってくださいねとなっている。市町村の事業をやるにはたいへんだから、最大限活用すれば、実際には少なくとも70%になる。(15万円以下の規模であっても) 仕組み上は、150メートル以内でつなげば、まとめて対応できるようにになっている。

⑤ 農地、水路などの農業用施設の災害復旧にあたっては、現地の状況に詳しい関係者の意見を反映させて対策を進めていただきたい。(部長) 基本的には市町村が事業主体でやることになっている事業なので、よもや関係者の意見を聞かないでやることはないと思っ

ているが、県としてもお手伝いしていく。私からは、「今回の豪雨では吉川区、大島区を中心に大きな被害が出た。農地、農業施設災害については中山間地に集中しているのでぜひ支援していただきたい。大島区足谷など被災した農民からは、同じ災害が繰り返されているので自分たちの意見も取り入れてとの声や降雪期までに工事を

終了させてほしいなどの声が寄せられている。関係者の間では不安が広がっている。しっかりと対応してほしい」と要請しました。これに対して米田農地部長は、「おっしゃる通りで、頑張ってくださいませ」と答えました。



平和への思いがあふれた吉田洋子さんの絵手紙 (高田図書館)

妻の父親が亡くなって初めて迎えるお盆、義母、妻の兄妹などと一緒に柏崎市安田にある慶福寺の盆参に出かけてきました。冬の葬式の時以来、何度か訪ねたことのあるお寺ですが、庭内をゆつくりと見たのも、本堂の中に入ったのも初めてでした。

安田駅周辺が見える境内。大人の手で二抱えもある大きな杉が四本立っています。夏の強い日差しが大地をじりじりとさせるなか、アブラゼミとミンミンゼミが賑やかに鳴いていました。時々、北の風が石の階段にそって吹き上げてきます。「涼しいもんだね」「気持ちいい」などと言いつつながら、義兄夫婦と境内を散策しました。

義母から声がかかり、本堂へ入りました。外にはわからなかったのですが、子どもやお年寄りなど大勢の人たちがそこにいました。少なくとも百人はいたでしょう。焼香台の置いてあるところで手を合わせている人、位牌を一つひとつ見ている人、久しぶりの再会を喜び合っている人たちなどとても賑やかでした。

位牌がずらりと並んでいるところに立っていると、義兄が「右から三番目のが家のだよ」と教えてくれました。妻の実家の位牌には、「先祖代々の霊位〇〇家」の文字だけでなく、「初右エ門」という屋号も入っていて、とても身近に感じられました。

盆参というのは宗派によって、中身も流れも違うのでしようが、この日は初盆を迎える人たちは最初にお斎、続いてお経、法話という順番になっていました。

縦長で足の短いテーブルをコの字形に並べたところがお斎の場です。座っていると、最初に麦茶が配られました。続いて、パック入りのお寿司、さらにお汁、漬物という順番で運んできてもらいました。お汁の中の具としては茄子、夕顔、それに油揚げも入っていたように思います。

お斎の時の風景はまさに壮観でした。縦長のテーブルはコの字形でも長い部分が三〇メートルくらい長さになります。その中央部に学校給食で使うものと同じバケツが四個ほどおいてありました。中に入っているのはお汁です。料理当番のお母さんたち数人が、首にタオルを巻き、エプロン姿でテキパキと動き回っていました。バケツの中の汁をお椀に入れる、お盆に入れて運ぶ、お代りいかがですかと声をかける、その熱気がすごかった。私も声をかけられ、お代りをさせてもらいました。

お手伝いのお母さんたちの動きに混じって、良寛さんのような風貌をした安寿さんが、盆参に来た人、一人ひとりに声をかけておられました。すでに百歳を越えているということでしたが、人の肩に手をそつとおいて、「元氣かね」と声をかける、その姿がじつにやさしく映りました。

お寿司を食べながら、妻の実家と親戚の「街のおばさん」が思い出話を披露してくれました。「街のおばさん」の子ども時代、盆参は最高の楽しみだったそうです。出かけたお寺は、鯨波の妙智寺というお寺でした。食べ物が少ない時代ですから、食べられるものは何でも食べました。お斎の時にはお汁を何杯もお代りしたとか。笑ってしまったのは、「いごねり」の話です。甘い羊かんが出たと思って食べたところ、「いごねり」だったというのです。

私にとって慶福寺の盆参は初めてです。お寿司などをいただいた時、人の話声が途絶えた一瞬があり、遠くから鳩の鳴き声が聞こえてきました。ふと、思い出したのは、「今度はお墓に行くことになる」と身振り手振りで語った義父の言葉です。今年の正月二日のことでした。この言葉が義父から聞いた最後の言葉となりました。

越後よしかわやっただれ祭り、今年も大盛況

いまでも耳の中で太鼓の音が聞こえます。神輿を担ぐ若者たちの「ワッショイ、ワッショイ」の声も……。越後よしかわやっただれ祭りは今回も盛り上がりました。感動的なドラマがいくつもありません。

今春開校したばかりの県立吉川高等特別支援学校の生徒のみなさんが区体育祭に続いてこの祭りにも参加してくれました。原発事故で福島県から避難してきている人たちも初参加です。子ども神輿は今年も増えました。たくさん子どもたちが祭りに参加してくれます。先日の豪雨でたいへんな目にあつた人たちの顔も見えました。

私が祭りに参加したのは夕方からとなりました。地元吉川区のよさこいグループ「百華踊乱」は「ハレルヤ」などリズム感あふれた3つの踊りで集まった人たちを惹きつけました。続いてストリートダンス。こちらは強烈なリズムとスピード感が魅力的でした。

祭りでは屋台が出て、美味しい食べ物が並びました。地場産の野菜は初登場でしょうか。私は一口メロンを買いました。ゲームコーナーもできました。大勢の人が寄って、語りあい、買い物も楽しむ、そして、みんなが集中するものがあります。早食い、くじ引き、それから、最大の盛り上がりをつくりだすのは神輿行列です。まずは、子ども神輿、子どもも若いお父

さんもお母さんもみんなうれしそう。子ども神輿はペットボトルで作られた稲穂竿灯の中を進みました。とてもきれいでした。

さて、大人神輿、今年も稲穂竿灯を県道柿崎牧線沿いに移動させてから、ダイナミックな動きで観衆を魅了しました。原之町十字路で電話工事用のトラックの高いところから大人神輿を「さあ、来い、来い」と指揮していたのは大滝健彦さん（上越市消防団吉川方面隊長）。乗りに乗っていました。

昨年から登場した吉川中学校の生徒のみなさん、今年も「吉中参上」の旗を掲げての参加です。原之町十字路では神輿に乗った人たちが餅撒きもやってくれました。これもまたいいもんですね。

越後よしかわやっただれ祭りは今年も大成功。準備をし、祭りを成功させる原動力となったのはいうまでもなく実行委員会の皆さんたちです。ありがとうございました。

